

# 岩宿遺跡を発見した相澤忠洋

無名の青年による大発見で、日本歴史は数万年さかのぼった

## ●「一家団欒」を夢見て

長い間、考古学者による発掘調査は、黒土の層（縄文文化）を掘り進めたあと、その下に赤土の層が出てくれば終わりとなっていました。赤土とは、関東ローマ層とよばれる火山灰が堆積した地層です。

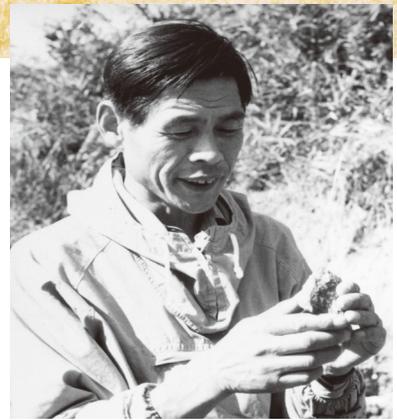
1万数千年以上前の日本列島は、火山灰が降り注ぎ、動物はおろか草木も生えない死の世界だと考えられていました。そのため、「日本には旧石器文化はない」と長く信じられてきたのです。この常識をくつがえしたのは、相澤忠洋という無名の考古学研究家でした。

相澤は、1926（大正15）年に生まれ、少年時代を鎌倉で過ごしました。9歳のとき、家庭の事情で一家がばらばらとなり、彼は土器などを見つけてはさびしさをまぎらわせていました。ある日、集めた土器を大人に見せ、何に使ったのかをたずねました。「大昔、いろいろの火を囲んで一家団欒をした。これはその跡から出てきたものなんだよ」。相澤少年は、この「一家団欒」という言葉を一生忘れることはありませんでした。

「いったい日本には、いつごろから人が住み始めたのか。その一家団欒の跡はどこまでさかのぼれるのか」。それを知ることが、彼の人生の夢となりました。

## ●世紀の大発見

戦後、相澤は群馬県桐生市で、納豆の行商のかたわら、本格的に遺跡の発掘に打ちこみました。日本列島は、火山灰による酸性土壌のため人骨化石が残りにくいのです。そのため、日本人が旧石器時代にも生活してい



石器を手にする相澤忠洋  
1972（昭和47）年当時

たことを証明できるかどうかは、層位のはっきりした地層から人工物であることが明らかな石器を発見できるかどうかにかかっていた。

昭和21年、相澤は、群馬県笠懸村（現・みどり市）の切通し（切り開いてできた道）の、関東ローマ層の地層が露出した崖の中から、地元では産出しない黒曜石の石片を数点発見し、さらに、昭和24（1949）年には、完全な形の石器を発見しました。

## ●岩宿遺跡などから磨製石器も出土



局部磨製石器（千葉県・出口鐘塚遺跡  
千葉県教育委員会蔵）

世界の考古学では、石器の作り方によって「打製石器＝旧石器、磨製石器＝新石器」と区別します。

日本では、岩宿遺跡など旧石器時代の遺跡からは、打製石器のほかに、部分的に磨いた磨製石器（3万5千年前）も出土しました。日本の「ものづくり」の技術は世界の最先端を行くほど進んでいたとも考えられます。

ただし、岩宿遺跡の時代を新石器時代とよぶことはできません。この時代には新石器文化の指標である農耕はもとより、土器もまだ作られていなかったからです。このように、世界各地の文化・文明は、発展の仕方が異なっていることがわかります。